



Title	「キャラ」に着目した青年期の自己多元性の心理学的探究
Author(s)	藤野, 遼平
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101603
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"> 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (藤 野 遼 平)

論文題名 「キャラ」に着目した青年期の自己多元性の心理学的探究

論文内容の要旨

本博士論文では定量的研究, 定性的研究, 事例研究からなる4つの研究を通して, 現代の青年において顕著に見られる自己の多元化の様相を, 「キャラ」という現象を足がかりにして検討し, 得られた知見をもとに現代の青年の自己の構造について論考するとともに青年を対象とした心理臨床への応用可能性について検討することを目的とした。

【第1章】現代青年におけるキャラとその理論的序説

本章では, まず若者の発達段階である青年期の自己形成・アイデンティティおよび社会的関係について概観し, その上で現代において顕著に見られるようになってきた自己概念や社会的関係における役割である「キャラ」の諸特徴について検討した。変容する現代社会における青年期の友人関係においては「キャラ」という用語を用いたコミュニケーションが多用されており, 現代の若者は状況や属する集団での対人関係に応じて複数の「キャラ」を振る舞い分けている。キャラには「理解のしやすさ」「コミュニケーションの円滑化」「存在感の獲得」といったメリットがある一方, 「固定観念の形成」「言動の制限」「キャラへの囚われ」といったデメリットもあり, それが「いじめ」や「キャラ疲れ」といった不適応を引き起こすきっかけになることが明らかになっている。しかしキャラを振る舞う者がどのようなパーソナリティを抱えており, キャラに対してどのような意味づけを行なっているのか, またキャラがその者の自己の在り方, 特に自己の切り替えや多元化といった側面に対して, どのような影響を与えているかについては明らかになっていない点が多いことを検討した。

【第2章】青年期における「キャラ化」に対してパーソナリティが与える影響(研究1)

本章ではキャラを振る舞う者の背景にあるパーソナリティや自己の在り方について量的調査の側面から検討した。研究1ではコミュニケーションの場において「キャラ」と呼ばれる, その人の特徴や個性に応じて割り振られた役割を振舞うことを「キャラ化」と定義した。研究1においては「キャラ化」を測定できる尺度を作成することを第1の目的とし, 「キャラ化」に特徴的なパーソナリティとされている「自己の多元性」「状況に応じた切替」「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」「日常生活演技」の影響を調べることを第2の目的と定めた。大学生454名を対象に質問紙調査を行った結果, キャラ化には, キャラに従って振る舞うことを強いられるような側面である「受動的キャラ化」とキャラを自覚して利用する側面の「能動的キャラ化」といった二つの側面が存在することが明らかになった。また, それぞれ「受動的キャラ化」には「状況に応じた切替」の意識的自己切替、友人の選択切替、無意識的自己切替と「日常生活演技」の調和的演技、困難状況、実利、「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」の拒否回避欲求が, 「能動的キャラ化」には「状況に応じた切替」の友人の選択切替、意識的自己切替と「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」の賞賛獲得欲求、「日常生活演技」の調和的演技そして「自己の一元性」が影響を与えていることが示された。

【第3章】青年の「キャラ」に対する意味づけによる自己意識と友人関係―「外キャラ」「内キャラ」の観点から―(研究2)

現代を生きる青年がどのようにキャラを持つ(あるいは持たない)ようになり, キャラがどのように意味づけられ, それにより自己意識や友人関係様式に差異が見られるのかを検討するため, 大学生10名に対するインタビュー調査をした。得られたデータを分析した結果, キャラに対する10個の概念が抽出され, それらを類似性および理論的根拠をもとに「内キャラ」「外キャラ」「キャラ無し」のカテゴリーに分類した。そのうえで「外キャラ」「内キャラ」「キャラ無し」の特徴をカテゴリー重複せずに持っている者を各カテゴリーを代表する者としてナラティブ分析を行った。その結果, それぞれのキャラに対する意識によって友人関係様式や想定される不適応状況, 自己

意識が異なることが示された。また「内キャラ」では自己を一元的で固定化された生来一貫したものとして捉えられている一方で、「外キャラ」では自己の多様な側面を状況によって振る舞い分けるといった多元的な在り方を示されていたが、両者は相反するものではなく「外キャラ」の特徴を持つ者が「内キャラ」の特徴も持っているケースが多いことも確認された。

【第4章】後期近代における自己の多元化の傾向とアイデンティティ理論に関する動向と展望

前章までは現代の青年において顕著に見られる「キャラ」という現象について検討したが、キャラによるコミュニケーションの背景には自己が多元化してゆく後期近代の特徴があるとされている。社会全体に共有されている価値観である「大きな物語」が失われ価値観が多様化した後期近代社会と呼ばれる現代においては、自己が一元化されず類型的なキャラを演じながらもそのどれもが自分であるといった多元的な自己のあり方がより顕著になってくる。Eriksonのアイデンティティ理論をはじめとする過去の研究からは自己が多元化していることは精神的健康を阻害することが明らかになっているが、実証的研究によって、自己が多元化しつつもアイデンティティを形成し精神的健康を保っている青年の姿が近年では報告されている。多様に変化し続ける社会の中で様々な状況に対して柔軟に複数の自己を振る舞い分けつつもアイデンティティを失わずにいるためにはどのような能力が求められるのか、またそのためにはどのようなサポートが青年に対して必要なのかを検討する必要があることが論じられた。

【第5章】後期近代における青年の自己の多元性の分類とアイデンティティの関連（研究3）

後期近代において求められているアイデンティティについて検討を重ねるためには、まず後期近代における青年の自己の多元性を測定し、アイデンティティとの関連を実証的に示すことが必要であると思われる。そのため、研究3では後期近代における青年の自己の多元性を測定できるような尺度を開発し、アイデンティティとの関連を検討した。大学生235名を対象に質問紙調査を行い、「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「自己不変」の3因子で構成される自己多元性尺度を作成した。そして自己多元性尺度と本来感尺度と組み合わせることで、青年期の自己多元性を状況性・戦略性・仮面性の観点から分類した。その結果、青年期の自己は「多元本来群」「多元仮面群」「一元的自己群」「自己拡散群」の4群に分類された。そのうえで「自己拡散群」は4群の中で最もアイデンティティ感覚が低く「一元的自己群」が最もアイデンティティ感覚が高いことが示された。しかしながら、多元的な自己を経験しているにもかかわらず自己不変の感覚と本来感が高い「多元本来群」は、従来健全であるとされてきた「一元的自己群」と一部において同等のアイデンティティを形成していることが示された。

【第6章】対話を通じてアイデンティティ形成へと至った不登校青年との面接過程（研究4）

後期近代において青年は、アイデンティティの問題に対して専ら自分の責任で将来を予見し行動してゆくことが求められ、アイデンティティ形成は個人の能力や努力に全面的に委ねられる傾向にある。しかし青年のアイデンティティの形成には周囲のネットワークを通じてダイアログ（対話）を生じさせ、それによってポリフォニー（多声性）的な対話が自己内に生じ、自己物語へと結実することが重要である。また、単一でまとまりのある自己体系とは異なるアイデンティティ形成像についても指摘されており、カウンセリングを通じて目指すべきアイデンティティ形成像についても検討が望まれていると言えよう。研究4では高校進学後に不登校となり自らのアイデンティティを見失った青年の事例を通じて以上のことを検討した。初めのうち青年は強迫的なまでに適応行動を行おうとし、それによりかえって疲弊していった。しかし自由な対話ができる空間として面接室が機能し始めカウンセラーとの間で率直な対話ができるようになるにつれて、青年は再び周囲のネットワークへと参入できるようになったと同時に無視され抑圧されてきた自己との間にポリフォニー的対話が生じ、新たな自己物語が紡がれアイデンティティの形成へと至った。

【第7章】全体的考察

本章では本論の各研究を総括するとともに各研究から得られた知見を通じて、（1）キャラに代表されるように青年の自己は状況に応じて変化するように多元化しているが、それと同時に決して変化しない自己イメージも保持しており、それらは互いに排他的ではなく、むしろ互いに併存しているという点、（2）多数の自己間においてポリフォニーを生み出すような対話（ダイアログ）が生じることによって自己物語が形成されるという点について確認した。その上でまず、多元的な自己と不変的で一元的な自己の共存について「対話的自己論」におけるmeとSelfを援用することで整理することを試みた。次に物語の一貫性が重要視されている自己物語においても、多数の自己間のポリフォニー的対話がなぜ自己物語の形成を促すことができるのかについて、こちらも「対話的自己論」

の理論を用いて考察した。最後に本博士論文を振り返り、後期近代という時代に突入した現代において青年の自己の構造がどのように変化しており、そのためにはどのような心理臨床が望まれるのかについて検討し、本博士論文にて示された知見は多様化した価値観に囲まれた青年の心理を理解しその支援をするにあたって助力となるであろうことを確認した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (藤 野 遼 平)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	野村 晴夫
	副 査	教授	佐々木 淳
	副 査	教授	辻 大介

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、現代の青年において顕著な自己の多元化の様相を、「キャラ」に着目して検討し、青年の自己の構造を明らかにすることを目指している。そのために、定量的・定性的研究、事例研究を実施し、青年を対象とした心理臨床への示唆を探っている。

第1章では、理論研究として、青年期の自己形成・アイデンティティおよび社会的関係に関する先行研究を概観し、現代に顕著な「キャラ」という現象の特徴を検討した。その結果、青年の心理・社会的適応における「キャラ」の功罪が浮かび上がった一方、「キャラ」を振る舞う者のパーソナリティ特性や「キャラ」への意味づけのほか、青年の自己の様相に「キャラ」が与える影響に関する未解明点が明らかになった。

そこで第2章では、青年期における「キャラ化」に対してパーソナリティが与える影響を、定量的な質問紙調査によって検討した。その結果、「受動的キャラ化」と「能動的キャラ化」の二側面を見出し、それぞれに対する、状況に応じた切替傾向や賞賛獲得欲求等のパーソナリティの影響が明らかとなった。

第3章では、前章で検討した「キャラ」に対する意味づけの獲得過程を、定性的なインタビュー調査によって検討した。その結果、「内キャラ」、「外キャラ」、「キャラ無し」の各意識によって、もたらされる友人関係様式や不適応状況、自己意識が異なることが示された。

ここまで検討してきた「キャラ」の語に表れた自己の多元化が、単一的な自己への統合を含意する従来のアイデンティティ理論に有する意義は、明らかではない。そこで、第4章では、自己の多元化傾向とアイデンティティ理論に関する研究動向を概観し、それらの将来展望を試みた。その結果、変化し続ける社会状況にあつて、柔軟に複数の自己を振る舞い分けながらアイデンティティを形成するための要因や支援策を検討する必要性が示された。

前章の問題提起を踏まえ、第5章では、青年の自己の多元性を測定する尺度を開発し、アイデンティティとの関連を質問紙調査によって定量的に検討した。その結果、青年期の自己は「多元本来群」「多元仮面群」「一元的自己群」「自己拡散群」に分類され、アイデンティティ感覚は「自己拡散群」において低く、「一元的自己群」において高いことが示された。その一方、多元的な自己を経験しているにもかかわらず自己不変の感覚と本来感が高い「多元本来群」が、「一元的自己群」と同等のアイデンティティを形成していることも明らかとなった。

第6章では、こうした自己の多元性をはらみつつもアイデンティティを形成しようと模索する様相を、アイデンティティ形成途上の不登校青年に対するカウンセリング事例から探索した。その結果、青年のアイデンティティの形成には、社会的ネットワークにおけるダイアログが、ポリフォニー的な自己内のダイアログを生み、自己物語へと結実することの意義が示された。

第7章では、各研究を「対話的自己論」を援用して総括し、現代青年の自己の構造の特質と、それに応じて求められる心理臨床を提起した。すなわち、状況に応じて変化する自己と変化しない自己が両立する様相が明らかになると共に、その両立が困難を来した局面では、複数の自己間にポリフォニー的なダイアログを生み出す支援の有用性が示唆された。

本研究は、「キャラ」の語に表されるように、その場の状況に合わせて自分自身を柔軟に変化させる現代の青年が、従来発達課題とされてきたアイデンティティへと統合的にまとめ上げる可能性と困難を、多様な研究方法によって探求するとともに、その結果から心理臨床への実践的示唆をもたらした。

よって、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。